



■主な内容
P2~7 特集 萩日吉神社の流鏝馬
P8~11 やくばトピックス
お送りします 後期高齢者医療被保険者証 ほか
P12、13 スポーツときがわ No.7

■ 1月20日(日)、3年に一度の萩日吉神社の流鏝馬(やぶさめ)が行われました。勇壮な騎馬武者の姿を一目見ようと、大勢の観客が訪れました。(関連記事は2ページから)

受け継ぐ誇り

1月20日、萩日吉神社の流鏑馬（やぶさめ）が行われました。今月の「広報ときがわ」では、これまで大切に受け継がれてきたこの行事と、それを伝えゆく「明覚郷」の方を中心に追いかけてきました。



流鏑馬当日の早朝、明覚郷の当番家の前では明けゆく空に向かってこの日最初の矢が放たれた。

歴史が物語る中世武士の誇り

3年に一度行われる萩日吉神社の流鏑馬（やぶさめ）は、鎌倉時代武家政権の先駆けとして上洛を果たした木曾義仲の家臣7苗（7氏）により、天福元年（1233年）に奉納されたのが始まりと伝えられています。

家臣の7苗とは、町内の明覚郷（田中、馬場及び瀬戸地内）の市川、馬場、萩窪の3氏、小川町の大河郷の横川、加藤、伊藤、小林の4氏で、先祖が木曾義仲の家臣と伝えられています。それぞれの郷では持ち回りで行事の一切を取り仕切る「当番家」から馬が出され、萩日吉神社に流鏑馬を奉納してきました。今回、明覚郷の当番家は、大字田中の市川裕彦さんのお宅です。

疾走する馬上から弓的を射る流鏑馬は、中世武士の間で盛んに行われた行事。神社に奉納する神事的な色彩も強く、以前は町内の春日神社（玉川地内）や、近隣の鳩山町大豆戸の三島神社、嵐山町鎌形の八幡神社、小川町角山の八幡神社及び大塚の八幡神社、越生町西和田の春日神社、日高

市新堀の熊野神社などでも行われていたそうです。これらのうち現在でも行われているのが、町内の萩日吉神社と毛呂山町の出雲伊波比神社だけです。流鏑馬の準備は、昨年の12月中旬から矢を作るための矢篠を切り出す「篠切（しのぎり）」から始まります。年明け早々の1月6日には、矢作りや的板など様々な用具を準備する「矢作（やづくり）」の作業が行われました。

会場となる特設馬場の準備は、流鏑馬の一週間前・1月13日に行われました。「クネユイ」と呼ばれるこの作業の中心は上宿、下宿地域（西平地内）や萩日吉神社関係者のみなさん。明覚郷や大河郷の方は、作業に一切加わりません。

こうして流鏑馬が翌日に迫った1月19日、明覚郷では関係者一同が流鏑馬の成功を祈願し祝盃をあげる出陣の行事「ヨイマチ」が行われます。「ヨイマトウ」とも呼ばれるこの行事でも、以前は明覚郷地内に設けられた特設馬場で、本番と同様に馬を走らせて矢を射っていたそうです。

①「矢作」は明覚郷総出で行われる。ちなみに、今回用意された矢は約800本。②霜柱が立つ地面に柱が打ち込まれ、特設馬場の準備が進められる「クネユイ」。③関係者一同で祝杯をあげ、流鏑馬の成功を祈願する「ヨイマチ」。



明覚郷 市川家 市川裕彦さん

今回明覚郷で当番家を務めた大字田中の市川裕彦さんにお話をうかがいました。現在30軒程で構成される明覚郷の一員として、以前から「自分の家から馬を出したい」と思っていたので、当番家を務めることができたのは、非常に名誉なことです。

しかし流鏑馬は、当番家だけで行うものではありません。準備から当日の執行まで、明覚郷のみなさんをはじめとする流鏑馬関係者、警備や交通安全に携わる数多くの方に、様々な「尽力をいただきました。無事、全ての行事を終えられたこと、深く感謝申し上げます。」

歴史史料をひも解くと、これまで流鏑馬は平坦に続けられたわけではないことがうかがえ、「継続する難しさ」を身を持って痛感しています。年配の方の教えを若者に受け継ぎながら、古式にのっとり執行するこの行事を、後々まで永く伝え続けていきたいと考えています。



1



2



3



①当番家付近で射られた矢を拾うことができ、嬉しそうなお子様たち。②「四方固め」の前に行われる「ヒキメ」。③日の出とともに県道を萩日吉神社へと向かう一行。④途中、慈光寺のひもとの女人堂に参拝。⑤陣場へ到着し挨拶を交わす両郷。⑥様々な来客を迎える陣場。⑦「夕まとう」に備え準備される的板。⑧いざ、「朝まとう」に出陣。⑨「朝まとう」で馬場を駆け抜ける神馬。⑩一日中、参拝客で賑わった萩日吉神社境内。

が二の馬という順番。1回目は「バミセ」といって、神馬に馬場を見せます。2回目は乗子が手綱を持たずに走り、3回目は「ノッパライ」といって走り終えた後はそのまま陣場へ引き上げます。「朝まとう」が終ると、萩日吉神社の境内は大勢の参拝客で賑わいを見せ、両郷も揃って「神社参拝」へと向います。午後1時、明覚郷の方は「宿回り」を行います。その昔、流鏝馬を奉納した際に、協力と援助を求めたお礼の意味で行うものとされるあいさつ回りで、西平地内上宿地域の4軒のお宅に徒歩で向かいます。

午後2時過ぎには「申の餅買い」の行事が行われます。これは神前にささげられた餅を持参して神社側の代表者が両陣場を訪問するというもの。古来から萩日吉神社の使い神は猿とされ、申の餅は「猿の餅」を意味しているそうです。この餅をいただき、いよいよ「夕まとう」が始まります。



現在高校2年生の萩窪さんから、初めて明覚郷の一員として参加した流鏝馬の感想をうかがいました。

参加したきっかけは「流鏝馬を（手伝ってみるか?）」と父から誘われたため。明覚郷の半纏を着て流鏝馬に参加するなんて、これまで一度も考えたことはなかったです。

半纏を着ると、父に「お前も（半纏を着たら）一人前なんだぞ。」と言われて緊張しましたが、周りのみなさんから色々なことを教えてもらって、あまり大変だとは思われず、楽しい一日でした。

夕まとうの時、的板を持つ「角持（かくもち）」として馬場に立つと、周りを囲む観客の多さに驚きました。矢が自分の方に向かって飛んでくるのは怖かったです。すぐそばを走る馬の力強さや、矢が的に当たった時の大きな音に感動しました。

今後機会があったら、明覚郷の一員としてぜひ参加したいと思えます。



明覚郷 萩窪家 萩窪 裕さん

親子で伝承する流鏝馬の誇り

1月20日、流鏝馬当日の朝が訪れました。空にまだ星が輝く頃、市川さん宅には明覚郷の関係者が続々と集まってきました。午前6時半を過ぎると、神馬の飾り付けが始まりました。明覚郷の神馬は神々しい雰囲気の良い馬です。出発前の準備を一目見ようと、次第に近所の人も集まっています。

およそ1時間で飾り付けを終え、出発の準備が整いました。馬の背にまたがった騎馬武者「乗子」が、「矢取りっ子」を務める市川廉さん（大字馬場）の持つ矢立ての紙に、弓につがえた矢の先を三度当てて一礼する「ヒキメ」を行い、第一の矢を萩日吉神社へ向けて放ちました。続いて東西南北天（中央）と数本の矢を放つ「四方固め」が行われ、見物に訪れた人たちは大騒ぎ。この矢を手に入れるとその家庭が一年間幸福に過ごせるといわれているからです。

明覚郷の一行は萩日吉神社を目指し、およそ6キロの道のりを神馬の歩みに合わせて進みます。途中、桃木地内の八幡神社、西平地内の慈光寺女人堂でも「ヒキメ」「四方固め」が行われ、ここでも矢を拾おうとする見物客で賑わいます。こうして午前9時過ぎ、萩日吉神社に到着した一行は、居所となる陣場に幔幕を張り巡らし、的板の準備などを進めます。初めて明覚郷の一員として働く萩窪裕さん（大字瀬戸元上）も忙しそう。大河郷の一行も到着し、両郷陣場の準備が整うと、陣場の前で、それぞれお互いの陣場を訪れて挨拶を交わします。

午前10時頃になると、午前中に馬が走る「朝まとう」を一目見ようと大勢の観客が馬場に集まってきました。出陣の準備が済んだ両郷の一行も、神官を先導に当番、矢取りっ子、神馬の順で馬場に入場。神官が馬場の入口、中央、終点を祓い清め、所定の位置につきました。

「朝まとう」では矢を射らずに両郷とも3回走ります。今回の流鏝馬では明覚郷が一の馬、大河郷



「足に履いたわらじが歩きづらかったけど、衣装はまた着てみたいと思うくらい気に入りました。歴史が好きなので、勉強にもなったと思います。」

一番楽しかったことはどんなことだったのでしょうか？

「初めて馬に乗ったこと。寒かったけれど高い背の上で気持ちよかったです。」

矢取りっ子は流鏝馬を行う中でも非常に重要な役割で、貴重な体験です。一生懸命その役目を果たす姿は、この両郷の目にも頼もしく映ったようです。



明覚郷 矢取りっ子 市川 廉さん



①流鏝馬のクライマックス「夕まとう」。②神馬の周りには家族連れが訪れる。③申の刻が近づき、馬場を目指して大勢の観客が訪れる。④「夕まとう」でも「四方固め」で矢が射られる。⑤介添えに手を引かれて馬場を行き来する矢取りっ子。(右が明覚郷、左が犬河郷)

血の中に流れる子孫の誇り

冬の陽が西の空に傾く申の刻(午後3時)、流鏝馬のクライマックス「夕まとう」が始まります。馬場はこの瞬間を一目見ようとする人たちであふれます。両郷の一行は陣場の荷物をまとめ、「朝まとう」の時と同じように出陣します。墨で「一、二、三」と書かれた的板を持つ「角持(かくもち)」の姿も見えます。ざわめく馬場は勇壮な一行の入場とともに静まり返り、緊張感が高まってきました。

馬場ではまず「ヒキメ」と「四方固め」が行われます。射られた矢が落ちてくると、我先にこの矢を拾おうとする人たちの歓声が、萩日吉神社の森に響きます。介添え役に手を引かれた矢取りっ子が、馬場の始点から終点まで走り終わると全ての準備完了。早朝、神馬の飾り付けを行った明覚郷の馬場良一さん(大字馬場)も緊張の表情です。

一瞬の静寂の後、馬が駆け出しました。5回疾走するうち、矢を射るのは3回。明覚郷は3回も3本の矢を持ち、一、二、三全ての的を狙います。これに対して大河郷は各回1本の矢を持ち、順番に3つの的を狙います。「パーン」矢が的に当たる乾いた音が馬場に響くと、大歓声が巻き起こりました。4回目は馬上で両手を交互に前後へ伸ばしたり、扇を広げたりします。5回目は乗り払いを意味する「ノッパライ」で、歴史絵巻の余韻を残しながら馬場での一切の行事が終了しました。両郷は次回の再会を約束し、別れを惜しみながら朝来た道を引き返し、それぞれの郷へと帰ります。

郷土の生きた歴史ともいえるこの貴重な行事は、埼玉県無形民俗文化財に指定されています。明覚郷をはじめとする流鏝馬に携わる方々の負担は大きく、伝承には多大なご苦労があるかと思われませんが、今後もこの勇壮な流鏝馬を守り続けていきたいと思っています。



明覚郷 馬場家 馬場良一さん

「夕まとう」を目前に控えた陣場で、出陣の準備に余念のない馬場さんにお話をうかがいました。

明覚郷では世代交代が進みつつあると感じています。今朝行った、神馬の飾り付けの時も、口を出さないように心がけていましたが、なかなかそうはいきません(笑)。

こうした行事は急にやれと言われてすぐに出来るものではありません。乗子が馬から落ちるようなことがあっては困りますので、神馬の飾り付けは特に気をつかつつ。徐々に若い方に受け継いでいきたいです。

この流鏝馬は、私にとってもいわば運命。先祖が受け継ぎ、親がやってきた事に、物心ついた時にはすでに関わっていたのです。矢取りっ子も乗子も経験してきました。

今後、流鏝馬を続ける上で様々な問題があると思いますが、大切に伝承された行事に息づく先祖の誇りをいつまでも守りたいと思います。